第 13 回国際日本学シンポジウム「感覚・文学・美術の国際日本学」
セッションⅡ「ファン・ゴッホと日本　―ガシェ芳名録紹介本をめぐって―」
2011 年 7 月 10 日（日）於：お茶の水女子大学

日本におけるゴッホ受容―1912 年を中心に

東京文化財研究所企画情報部長　　田中　淳

近代日本の美術の歴史が、ヨーロッパ近代美術という異文化受容の問題と密接な関係にあることはいうまでもないだろう。レアリスム、印象派、ポスト印象派、表現主義、キュビスム等々、ヨーロッパ近代美術の目まぐるしいほどの展開に、東アジア地域にある日本の美術は少なからず影響を受けてきた。そうしたヨーロッパ近代美術の画家たちのなかでも、ポスト印象派の画家としてのフィンセント・ファン・ゴッホ（1853－1890）の作品は、明治末年にあたる 1912 年前後を中心に、新しい芸術を渇望する日本の青年たちに複製図版と言説をとおしておおきな影響をあたえた。

今回の発表では、ゴッホの作品をいかに受容したか、萬鉄五郎（1885－1927）を中心に下記の三人の言説と作品をとおして、受容者の側の主体に焦点をあてて近年の知見をまじえて考察することにしたい。

1、「民芸」運動を創始したことで知られる思想家柳宗悦（1889－1961）は、青年時代、『白樺』（1910 年創刊）同人であった。同雑誌は、文芸誌でありながらも、同人たちの共通した嗜好から、積極的にヨーロッパ美術を紹介したことでしられる。とりわけゴッホを含むポスト印象派については、柳は、日本に舶載された C. Lewis Hind, ”The Post Impressionists”, London, 1911 をもとに「革命の画家」（『白樺』第 3 巻 1 号、1912 年 1 月）を寄稿した。その柳にとって、複製図版としてのゴッホの作品について検討したい。

2、萬鉄五郎（1885－1927）は、1912 年 3 月に東京美術学校西洋画科を卒業している。卒業制作「裸体美人」（東京国立近代美術館蔵、国指定重要文化財）は、萬自身が後年、「ゴッホ、マチスの感化のある」と認めるように、日本においてゴッホの絵画から影響を受けた作品である。しかも、いち早く直接的な影響を示す作品とされている。萬が、どのようにゴッホの作品を受容することができたのか、1911 年からの画家の内面の変化をみていきたい。

3、中川一政（1893－1991）もまた、『白樺』に掲載されたゴッホの絵画に魅せられた青年画家のひとりであり、後年、萬とともに春陽会（1922 年創立）に参加した。中川の場合は、ゴッホに対する敬愛の念は、一過性のものではなく、生涯をつうじてかわることがなかった。その受容の姿勢は、作品にもあらわれているが、一方で戦後から晩年にいたると、画家自身が「文人画家」という評価をうけるようになる。

以上、三人の言説と作品から、近代日本におけるゴッホ受容の一端を検討し、受容する

主体の問題を考えたい。